

## キリスト教教育と私 (10)

塩野和夫

### (1)

1974（昭和49）年4月、同志社大学経済学部で4年生になった。卒業後はキリスト教神学の研究へと進むことを決めていたので、できるだけその準備をしておく必要がある。当時、神学を学ぶためにドイツ語が不可欠とされていた。それでドイツ語Ⅰを登録して、1年生に交じてドイツ語文法の基礎を学んだ。神学部の授業ではもう1科目（4単位）を履修できた。ある程度事情も分かっていたので、今回は躊躇することなく遠藤彰先生の聖書学演習を取った。ギリシャ語原典に基づいてマルコによる福音書を研究するクラスである。ヨルダン社の年輩の方や鎌田正之さんが受講しておられた。マルコ福音書10章32-34節を釈義された日のことである。遠藤先生は「エルサレムへ上って行く」という表現に注目された。それで、ギリシャ語の説明を終えた後に「上って行」かれたイエスの歩みを彼の実存や祈りと重ねて丁寧に解き明かされた。それはいつもの淡々とした語り口とは明らかに違っていた。思わず鎌田さんが「先生、そんな風に釈義してもらえると説教に使えます」と正直に感想を述べられた。笑みを浮かべながら先生は、「そうですか」と答えられていた。

4年次になると、卒業論文「中国の近代化と太平天国革命」執筆に多くの時間を割かざるをえなくなった。たとえば太平天国革命と中国の近代化関連を中心に大学図書館で書架の文献をあさった。寺町通りにあった古本屋にも立ち寄り、むさぼるように関連文献を探した。ほとんどは日本語だったが、古本屋で見つけた中国語文献も手に入れた。ところで、鳥ゼミの雰囲気はその頃には明らかな変化が生じていた。ゼミの前後にひそひそと情報を交換し合う数名のグループがいくつかできていた。そのために全体のまとまりは弱くなる。彼らの話題は就職活動だった。そんな中で中嶋慎一郎君と家長隆君は大学院を目指していた。私も就職活動をしなかったのに、4年次になっても月曜日から金曜日まで大学に通い興味のある科目を履修した。学んでおく必

要を感じた一つは「経済原論Ⅱ（マル経）」だった。そして原論Ⅰ・Ⅱ（マル経）で得た知識を踏まえて、秋には3か月かけてマルクス・エンゲルス『資本論』3巻（大月書店）に挑戦した。それ以外では「世界経済史」を例外として経済政策的な科目、すなわち「国際経済論」「経済政策」「工業経済論」「流通経済論」「地域経済論」を受講した。先生方は自らの立場を鮮明にしながら自由闊達に論じておられた。主張が明確だったので、興味深かったり。

\*

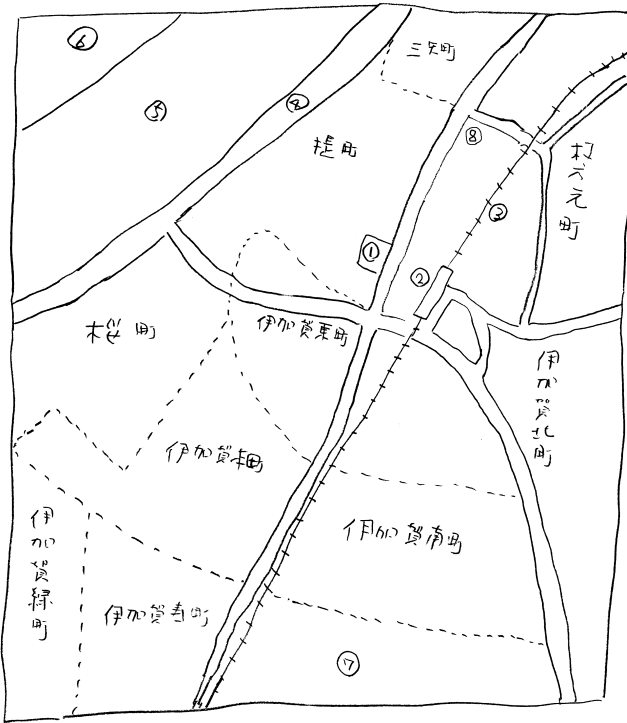
1974年に入ると香里教会は半年程の工期で教会堂の改築工事を始めた。そのため礼拝を初めとする緒集会は、日曜日だけ枚方市の農協会館を借りて行うことになる。農協会館は京阪電車の枚方公園駅を降りると、線路と並走している旧街道の西側にあった。そこから旧街道を北へ歩くと三矢町に入り、柴田勝正さんのお宅が左側にある。三矢町と線路を挟んで向かいに位置するのが枚方元町で、その辺りは小高い山になっていた。山の北側にはうみのほし幼稚園がある。さらに枚方公園駅から南に行くと、すぐそこは少年期に夢中になって遊んだひらかたパークの正面玄関広場になる。要するに農協会館は幼い頃の懐かしい思い出に囲まれた場所にあった。

教会学校では引き続き高等科を担当したが、もう一人の教師は山田律子さんに代わる。彼女は大阪音楽大学で声楽を専攻していて、毎月のようにK女学院で音楽指導をしておられた。行動派である。ところで、枚方公園の農協会館で教会学校の集まりは低調だった。そのため、香里新町にある小西家が高校生のたまり場になった。梅雨に入った6月のことである。中学生のN君から「Kが家出をしたらしい」と情報が入った。直ちに関係者は小西家に集まり、対策を打ち合わせした。その頃、中学生のK君は教会学校キャンプで出会ったギターに夢中になっていた。ところがNによる

---

1) 「読書ノート 1」と「読書ノート 2」にはなぜか1974年4月から12月までの記録がない。また、「読書ノート 2」の1975年1月から3月までの頁は社会科学関連の文献を記していない。したがって、この間は人文関連の文献だけとなる。

(人文関連) フランクル『夜と霧』山本有三『路傍の石』山本有三『生きとし生けるもの』『福音と世界 2月号』(特集 靖国の思想を問う) 山本有三『波』山本有三『風』戸村政博『靖国問題と戦争責任』山本有三『女の一生 上』Dodd, C. H., *History and Gospel*. 『横山隆一集 現代マンガ論Ⅰ』『園山俊一 現代マンガ論』齊藤惇夫『冒険者たち』ボヴェー『性と愛の発見』ピアス, フィリパ『トムは真夜中の小屋で』



- |         |        |          |         |
|---------|--------|----------|---------|
| ①枚方農協会館 | ②枚方公園駅 | ③京阪電車    | ④旧国道1号線 |
| ⑤淀川河川公園 | ⑥淀川    | ⑦ひらかたパーク | ⑧旧街道    |

農協会館の周辺地図 (1974年当時)

と、「Kの家では東大や京大の出身者が多く、国立大学しか認められていない。それで、ギターに熱中しているKとお母さんの間がぎくしゃくしている」らしかった。相談の結果、高校生会とよるだん会の有志30名ほどで手分けして、Kのいそうな場所を探すことにした。また、Nの案内でK宅を訪ねた。疲れた様子のお母さんが出てこられたので、手短かに用件を伝えた。

塩野 香里教会の塩野です。K君のことを聞き、30名ほどで手分けして探しています。

お母さん ありがとうございます。

塩野 それで、一つだけお願いがあります。K君を見つけたら、説得してお宅へ連れて帰ります。その際に、叱らないでほしいのです。むしろ温かく迎えて、彼の気持ちを聞いてあげて下さいませんか。

お母さん 分かりました。よろしくお願いします。

懸命に探したが、その日にKを見つけることはできなかった。ところが翌日、「京阪電車のF駅のベンチにKが座っていた」という知らせが入る。すぐにF駅に向かうと、ベンチにうずくまっているKがいた。「小西家に行こう。みんな心配してる」と声をかけると、うなづいてKは付いて来た。小西家に到着すると温かい食事を出していただき、「K君が見つかりました。間もなく連れて帰りますので、ご安心ください」と電話を入れた。その上でお母さんと話しあった内容を丁寧に説明し、「これでよかったかな!？」とKに確認した。小さな声で「ありがとう」と彼は答えていた。それからお母さんが待っておられるお宅まで二人で歩いていった。



▲農協会館での分級（1974年夏）



▶前列左より

2人目 山田律子先生

3人目 塩野和夫

高校生会（1974年冬 新会堂で）

2年目に入ったよるだん会はメンバーも定着し、安定した活動を続けていた。相談の結果、5月に止揚学園を訪ねることにした。読書会で読んだ福井達雨『アホかて生きているんや』によって止揚学園への共感が広がっていたし、社会福祉に関心を示す学生もいたからである。訪問を約束した日に、京都駅から東海道線で名古屋方面へ行く各駅停車の電車に乗った。1時間余りで能登川駅に着く。駅前の商店街を抜けると田園地帯が広がっていた。それでも道沿いには造成された住宅地に立つ新しい家もあり、地域社会の可能性を感じさせていた。止揚学園に着くと、福井達雨先生にまずあいさつうかがった。先生の机は職員室の一番奥にあり、後方の壁には新島襄の肖像画が掛けてあった。福井先生は手際よく、止揚学園の教育方針・学園の最近の動き・財政に対する考え、それと寄付活動について話された。それから紹介下さった職員によって、園内を案内してもらう。ゆとりのある教室・きれいな洗面所とトイレ・小さなプールなど、学園にはしっかりした建物がいくつもあった。止揚学園の全体からきびきびした精神性が伝わってくる。ある職員の部屋に置かれた机の上にごく自然と活けてあった一輪ぎしの野草は印象に残った。

農協会館で礼拝を初めて間もない4月だった。周辺に人がいないのを確認して杉田常夫牧師に声をかけた。

塩野先生、神学校への推薦書をお願いしたいのです。来春から東京神学大学か関西学院大学神学部へ行きたいと希望しています。

杉田牧師 用件は分かりました。返事はしばらく待ってください。

杉田牧師は無表情で、何か用事を思い出したのか急いでその場を後にされた。神学校への進学をめぐる、一番気にかかっていたのは両親だった。父と母は折々に「当たり前サラリーマンになってほしい！」とそれとなく聞こえるように話していた。そんな両親が大学で一向に就職活動を始めない息子をどう思っていたのかは直接聞いたことがない。また神学校の選択にあたっては、中学校・高等学校・大学経済学部とすでに10年間も学んでいる同志社を対象から外すべきだと考えていた。それで、東京神学大学と関西学院大学神学部が候補に残った。

希望の家の活動を支える組織の一つに、30名程の青年を構成員とするボランティア会議があった。2階の畳の部屋で行った4月の会議で、塩野は新年度のリーダーに選出された。責任を負った一年間にボランティア会議の協力した事業に、地域のアンケート調査がある。

アンケートはマンティカ神父が準備されていた。だから会議が終了した直後に、「アンケート調査をボランティア会議で実施してほしい」と神父はリーダーに持ちかけられた。協力できるかどうかを諮るため私は5月の会議で説明し、マンティカ神父が補足された。

- アンケートの目的は地域の家庭調査である。
- アンケートの対象は学童保育に来ている児童の家庭であり、保護者に聞く。
- アンケートは10項目あるが、初めの3項目は導入のための答えやすい設問である。重要なのはそれ以降の4項目である。最後の3項目に応じて下さる保護者からは聞いてほしい。
- アンケートは家庭に出向き、そこで実施する。
- 期間としては6月から2か月程度を考えている。

5月の会議はアンケートの説明で終わり、実施については各自が考えてくることにした。6月に聞いたところ、全員一致した意見でアンケート調査に協力することになる。そこでマンティカ神父も交えて、担当する家庭を決めた。協力を申し出たボランティアは約10名いたので、各自が3軒を受け持つことにして、全体で30軒を調査することになる。私の担当は4年生のB君、2年生のCさん、1年生のD君の家庭であった。調査した内容は9月以降のボランティア会議で報告し合うことにした。

調査を始めた。まず訪問したのはB君に案内してもらった彼の家である。須原通りを北に行き東に曲がってすぐの所にあった。6階建てくらいの新しい団地で「地域開発のために建設された」と何う。家にはおばあさんがおられた。雑談をしている間Bはおばあさんに甘えていたが、アンケートを始めるとすぐに部屋を出ていった。翌週に訪ねたのはD君の家である。Dに案内してもらった家は児童公園の東側にある平屋の建物で、お母さんがおられた。指導員に来てもらったのがうれしいのか、彼は上機嫌ですとお母さんに甘えている。アンケートが始まっても「お父さんは家にお



B君 先生、何してんねん、座りいな！  
塩野 座って、何するんや？  
D君 神様にお祈りするんや。  
塩野 何をお祈りするんや？  
A君 悪いことをしたら、「ごめん」て神様に謝るんや！

子供たちは眼を閉じ、手を合わせ、祈り始めた。その祈る姿は私の心を揺さぶらずにおかなかった。生まれながらに彼らは様々な問題を負わされている。それでも子供たちの純粋な思いがそのままに、そこには祈りという形で表現されていたからである<sup>2)</sup>。

(2)

7月に入って間もない頃、久しぶりにKMの家へ急いでいた。「おい俺や、KMや。ちょっと話がある」と数日前に電話があり、訪問を約束していたからである。お宅に着くとお母さんが応接室へ案内して下さった。すぐに現れたKMは見違えるように引き締まった体つきをしていた。

KM 久しぶりや、俺、痩せたやろ。  
塩野 調子、よさそうやな。  
KM 高槻の神峰山寺へ修養会に行ってから2年以上が経つ、早いもんや。  
塩野 病院の方はどうや？  
KM あれから調子が良くなってな。少しずつ病院の仕事をさせてもらえるようになった。  
塩野 それはよかった、順調なんや。  
KM それだけやない。外泊も初めは週に1日やったけど、2日3日と増えてきた。今では週の半分は家や。  
塩野 家に帰ったら何してんねん。  
KM 焼き物を作ってる。小さいけど、窯も買ってもらった。これで家でも皿を焼ける。

---

2) 参照、塩野和夫「希望」(『一人の人間に』33-35頁)



塩野 そうか、もうちょっとやな。

KM それで塩野に話があるんや。俺、また教会に行ってみようと思ってる。連れて行ってくれへんか？

塩野 そうか、いつでも案内する。けどな、教会は今改築中で枚方公園の農協会館という所を借りて礼拝してる。秋になって新しい会堂ができればこっちに帰ってくる。

KM そうか、それやったら教会堂ができてから、また行く。

塩野 それとな、よるだん会という学生のグループができたんや。KM も仲間になれると思う。いつか紹介する。

教会堂の改築工事は順調に進んでいた。ところが、春に入って思わぬ問題が生じてしまう。業者を変えざるをえなくなったのである。そのために当初工事を請け負った会社について、あらぬうわさや不安がささやかれるようになっていた。そこで教会側の責任者による説明会が開かれ、次のように話された。

- 工事を請け負った A 社は、止むを得ない事情により半ばで降りることになった。
- そこで、A 社とも相談し B 社に引き継いでもらうことにした。
- 業者の交替によって生じる追加経費はない。
- 工期もほとんど遅らせることなく、新会堂を竣工できる予定である。

説明会は終わり、多くの会員が会場を後にした時である。杉田牧師から「塩野さん、ちょっと」と声がかかった。牧師の方へ走り寄ると、周辺に人気のないことを確認した杉田牧師は宙を見上げるようにし声を細めて言った。

神学校の推薦状は書けません。

それだけ言うと、無表情なまま小走りに去っていかれた。

\*

8月上旬に西宮市にある聖和大学で3泊4日の教会学校教師ワークショップが開か

れた。香里教会からは大里しのぶさんと塩野が参加した。聖和大学へは阪急神戸線の西宮北口駅で今津線に乗り換え、次の門戸厄神駅で下車した。田畑の残るのどかな景色の中を山側へ歩くと、20分程で大学に着いた。こじんまりとしているが、校舎もキャンパスもよく整えられ快適な環境だった。ワークショップで多くの時間を割いた分団は天下幸恵先生のグループになる。杉田牧師のひと言に前途の見通しを失っていた私は、魂の抜けたような状態だった。「そらそうやな、ぼくらのためにもがんばってえな！」と励まして下さったおじさんの言葉に押し出され、神学をするために重ねてきた準備は一つ失われてはいない。しかし、その先に思い描いていた計画はすべて崩れ去っていた。だから、どこに向かい何を目指して歩んでいけばよいのか、見当もつかなくなっている。そんな状態であったにもかかわらず、新鮮なアイデアに満ちた天下先生の言葉は彼女の熱意と共に心に響き始めていた。

皆さんは教会学校の生徒に語りかける言葉をどこに探しますか。聖書学や教義学の本でしょうか。それらもいずれは大切になるでしょうが、まずは皆さんの足もとにある日常生活から探して下さい。そこには子供に語りかけるメッセージが必ずあるからです。

2回目の分団は自由時間となり、大学近辺の散策を奨励された。散歩しながら住民の日常生活に目を向け、子供に語りかける言葉を探すのである。各自が発見したアイデアは3回目の分団で紹介し話し合うことになった。

自由時間には大学と阪急電車の間に残っている田圃のあぜ道をゆったりと散策した。照りつける陽ざしをまともに受けながらも、そこには可憐な花々を見ることができた。伸びやかに花を咲かせる野草は生命に満ちていた。だから、野草を見つめながら過ごしたしばらくの時に、生きる勇気を与えられた。そこで、3回目の分団ではイエスの教え（マタイ福音書6章28-29節）に導かれて、田圃を散策して発見した野草の生命力について語った。その日の夜である。スタッフから思いがけない申し出を受けた。「明日の夕べの集いで塩野さんに証しをお願いしたいんだけど？」突然の提案で何のアイデアも思いつかなかったが、「せっかくの機会だから」と引き受けた。そして、一晩中今語ることのできる証しを考えた。3日目の夕べの集いが開かれた芝生の綺麗な中庭には、参加者のほとんどが集まっていた。マルコ福音書10章13-16節を読み、

讚美歌（1954年版）121番を歌う。それから夢中で、希望の家の子供たちのことを話した。みんな真剣に耳を傾けてくれた。涙をぬぐいながら聞いている人もいた。最後に讚美歌（1954年版）121番をもう一度歌い、夕べの集いは終わった。その夜、多くの参加者から声をかけられた。印象に残ったのはAMとFMの言葉である。

AM 金井愛明先生がしておられる釜ヶ崎のいこい食堂でボランティアをしている。状況は違うけれども、希望の家の話しはよく分かった。

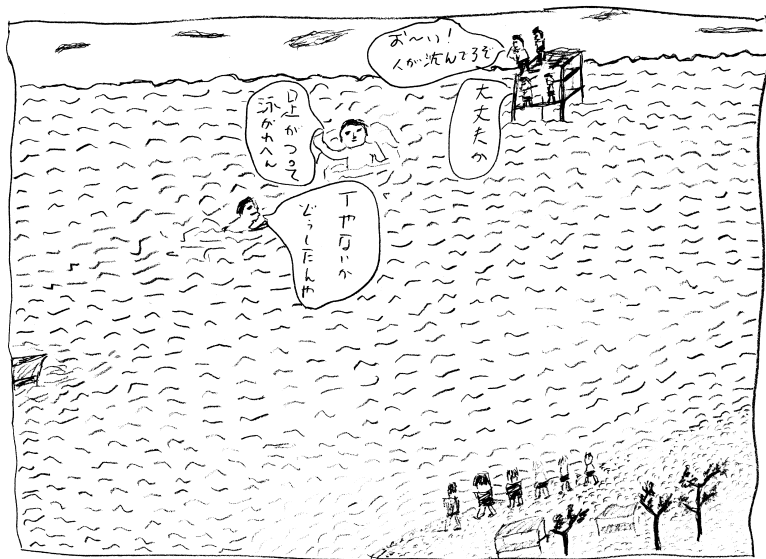
FM 私は広島女学院の出身で、高校生の時には広島南部教会に通っていた。その杉原助牧師は地域社会の課題を担うことを教えておられたよ。

ワークショップから帰った翌日に、都丘町子供会は琵琶湖西岸にある近江舞子での水泳会を計画していた。ところが、前日になっても監視員が足りない。それで急遽、引き受けることになった。バスに乗り込んで分かったことだが、もう一人の監視員も大学生で山田小学校の水泳クラブと一緒に指導している仲間のT君だった。近江舞子水泳場で半日を過ごし、アナウンスに従って子供たちが引きあげたのを確認し、浜辺へと泳いでいた時である。30メートル程沖合にある飛び込み台の方から、「溺れているぞ!」「人が溺れているぞ!」と叫ぶ声が聞こえてきた。一瞬引き上げるべきか引き戻すべきか迷ったが、無意識のうちに飛び込み台の方へ泳ぎ始めていた。近づいてみると、飛び込み台から5メートル程の所で男の人が浮いたり沈んだりしている。よく見ると、それはもう一人の監視員Tだった。

塩野 Tやないか。どうしたんや?

T君 足がつって、泳がれへん!

Tに抱きつかれたら、二人とも沈んでしまう。幸い、飛び込み台には泳ぎの達人そうな若者数名がいる。そこで、Tに向かって泳ぎながら指示を出した。「おーい、一人は片足、もう一人は別の片足、それから一人は片手を持ってくれ!僕がもう一方の手を持って飛び込み台まで連れて行く」。ところが、指示を終えて前を見ると、Tはすぐそこにいてしがみついていた。泳げなくなった私とTはぶくぶくと湖に沈みこ



湖に沈む（1974年 8月 近江舞子水泳場）

んでいく。後で分かったことだが、Tを助けるためにボートが岸から声の方に向かっていて。そして、二人が沈み込んでいった時に、ボートはすぐ後ろまで来ていた。それで、溺れた二人はすぐにボートへと引き上げられた。湖岸に着きバスに乗って座席に座りこむと、どっと疲れが出てきて深い眠りについた。それは安らかな眠りなどではなかった。夢の中にまで波が襲ってきて、体と心を丸ごと不気味な世界へと引きずり込んでいったからである。だから半ば夢だと分かっているけども、沈んでいく魂は何かを探さずにおれなかった。その時、暗闇の中で次第にはっきりと聞こえてくる声があった。

生きましょうぞ。

イエス様によって活かされましょうぞ。

その姿を私は見る、見えるんですね。

賢くなって、はっきり見たい。

それはワークショップを終えて別れる際に、FMが団扇に寄せ書きしてくれた言葉だった。その夜、近江舞子水泳場で経験した出来事を葉書に記してFMに送った<sup>3)</sup>。

\*

香里教会の教会学校夏期キャンプはこの年も同志社中学校由良キャンプ場で行われた。8月11日から13日までの小学科キャンプを終えると、13日から16日までは青年科(中学生と高校生)キャンプである。今回、新しく加えたプログラムがあった。昨年まで全員参加による水泳時間は5回あった。ところが、「水泳以外にも、浜辺でのバレーボールや山登りをしてみたい」という希望が出ていた。それで全員で参加する水泳を3回とし、後の2回は3つの選択肢「水泳・バレーボール・登山」から選ぶことにした。すると、浜辺でのバレーボールを選択する参加者が意外に多かった。キャンプの全体主題は「夢に生きる」で、3回の講演を試みた。



ダッシュが足りん!! (1974年8月 由良の浜辺)

- 1回目 8月13日  
「夢に生きた人々」
- 2回目 8月14日  
「夢に生きる」
- 3回目 8月16日  
「生命に生きる」



左より2人目 神田愛子さん  
5人目 池田義晴さん  
ある分団風景

(1974年8月 同志社中学校由良キャンプ場)

8月下旬にはよるだん会夏期キャンプを同志社の北小松学舎で

3) 塩野和夫「共に生きましようぞ」(『一人の人間に』38-40頁)

行った。2回目で宿舎や水泳場の使い勝手に慣れていたこともあって、プログラムは順調に進んだ。なかでも充実していたのは話し合いの時間である。何回も重ねてきていたので、お互いに打ち解けて存分に話し合えた。ただし、短期大学の2年生と大学の4年生にとって、「これが最後のよるだん会キャンプになるだろう」という予感がした。私も来年4月からの立場が不透明だったので、「次の夏キャンプ参加は無理かな？」と何となく切ないものを感じていた。

(3)

9月になるとすぐに京都ヨルダン社に立ち寄った。レオ＝レオニの絵本を探すためである。彼の作品はすぐに見つかった。レオ＝レオニのコーナーが設けられていて、何種類かの絵本を積み上げていたからである。そこから、レオ＝レオニ、谷川俊太郎訳『フレデリック』を手に取り、購入した。900円もした。

絵本の『フレデリック』にこだわったことには理由がある。数日前にAMから葉書を受けとり、そこに「塩野君はレオ＝レオニのフレデリック（野ねずみ）みたい！」とあった。そんな風に言われると、「フレデリックってどんな野ねずみなのかな？」と気になった。すぐに買い求めた訳である。自宅でゆっくりと絵本を眺めた。フレデリックはいつも「ぼおー」としていた。ぼおーとしながら、光や色それに言葉を集めている。そして、みんなから「きみって しじんじゃ ないか！」と言われていた。

『フレデリック』から思い出した言葉がある。遠藤彰先生には「ぼくのクリスマス」や「天の橋立にて」、「灰の中から」を読んでもらっていた。すると、その度に先生の言われた同じ言葉がある。それが「塩野君は詩人だね！」だった。ただし、そんな風に言われても自分で「詩人」などと思ったことはない。『フレデリック』をながめていても、AMから「あの野ねずみのように、少しはぼおーと過ごしなさい」とアドバイスされているように感じた。それからAMは絵本や児童文学を紹介してくれた。レオ＝レオニ『スイミー』や齊藤惇夫『冒険者たち』である。それらはみな購入して、ゆったりと読んだ。

その頃、音楽の好みにも変化があった。音楽の鑑賞は中学3年生にさかのぼる。夏休みの宿題にクラシック50曲程の感想文を課せられたのである。仕方なく、レコードプレイヤーとレコードを買い、ひたすらに聞き感想を書き続けた。その時、出会った

のがフリッツ・クライスラーのヴァイオリン曲である。「愛の喜び」や「愛の悲しみ」から奏でられる音色は心の深くにまで響いて魅了された。大学生になるとベートーヴェンの交響曲を聞いた。人間の意志と精神性に訴えかける「運命」や「合唱」の力強い演奏は生きようとする人間を励ましていた。ところが、大学4年生の夏にラジオから流れてきたのはクライスラーでもベートーヴェンでもなかった。それまでに何回も聞いていたが、あの時新たな感動を呼び起こされたのはモーツァルトのピアノ協奏曲だった。そこには何の気負いもなかった。大空を行く白雲にも似た自由で自然な音楽だった。その軽やかさは、見知らぬ世界への門戸の様にも思えた。早速、モーツァルトのピアノ協奏曲全曲をテープで購入した。

FMから葉書が届いたのは9月に入って1週間ほど経った日だった。次のような文章が記されていた。

8月は広島へ幼稚園の実習に行っていて、葉書を見るのが遅くなりました。琵琶湖で溺れそうになられたという文面を見て、驚きました。

返事が来たので、すぐに第2信を書いた。

琵琶湖から帰るバスで見た夢において水の底へと引き込まれていったのは、その日溺れた経験だけでなく現在置かれている精神的な状況も重なっていたと思います。つまり、神学をするために具体的にどこへ向かっていけばよいのか分からず、途方に暮れていたからです。沈み込んでいった時にあなたの寄せ書きが声として聞こえてきたのは、直観的にそこに何か手がかりを感じたからだと思います。

FMは9月中に何通も葉書を送ってくれた。それらの内容は次のようにまとめることができる。

広島南部教会の杉原助牧師は「現場を持つことが大事だ」と教えてくださいました。塩野さんにとっての現場は東九条です。希望の家の子供たちです。このことはご自分でも分かっておられるはずです。それなのに神学をする場所を探しておられる。けれども、あなたには東九条という現場があって、その次に神学があるはずで

す。だから、塩野さんはまず東九条に行くべき人なのです。

FMの言葉は素直に聞くことができた。混じりけのない真心がこもっていたからである。このようにしてFMのアドバイスに耳を傾けた時、予想もしなかった可能性が開けてきた。まさにこの可能性について思いめぐらしていた10月上旬である。聖和大学のワークショップに参加していた女子学生が希望の家に訪ねてきた。わざわざ彼女が足を運んでくれたのは、ある事実を知らせるためであった。それは「FMには結婚を前提にお付き合いをしている男性がいる」ことだった。彼女はそれ以上何も語らなかった。しかし、その事実を知らされてからは以前のように心を開いてFMと話し合うことができなくなった。いつしか葉書のやり取りもしなくなっていた。

\*

希望の家のボランティア会議では9月に入るとアンケート調査の報告会を始めた。そこで改めて知らされたのは、子供たちが意外に広い地域から集っていた事実である。10名のボランティアはマンティカ神父の指導に従い、各自が生徒3名の家庭を担当した。神父はなるべく狭い範囲で訪問できるように調整して下さった。

ボランティアによって報告内容は多様で面白かった。もちろんアンケートの結果を中心に話された。しかし、訪問した家庭や周辺地域の様子とその表現方法に違いがある。たとえば、カトリック教会のメンバーで社会人としてマイカーを所有している女性がいた。彼女は絵画的に状況を捉え表現された。報告する際にも、大きく目を見開いて訪ねた家庭とその辺りの仕事（廃品回収だったと思う）を絵に描くようにして話される。対照的に私は保護者から聞いた話とそこから考えさせられる課題をぼそぼそと報告した。香里教会よるだん会のメンバーでもあるK君の番になった。Kの顔は話す前からこわばっている。彼が担当して初めて訪問したのは0番地（この名称は差別的であり、現在は使われていない）だった。Kは地域と住宅の様子を話してくれた。報告が終わると、会議に同席されていた品田さんから0番地について説明があった。

戦後、日本の各地に行く所のない人がいたんや。そういう人たちが集まった場所の一つに、大都市では大きな駅の近くがある。京都の場合やと、京都駅の近くやった。0番地という所は、京都で行く場所のなかった人が集まって生活した所なんや。



品田さんの話しをみんな静かに聞いていた。ふと、「橋の下のおっちゃんも行く所のない人やったな」と思い出した。アンケートを目的とした家庭訪問と報告会から教えられた事は多く、東九条に対する理解を深めることができた。

アンケート調査のために訪問したB君・Cさん・D君以外に、訪ねた家庭が1軒だけあった。「靴下の穴をぬって！」とせがんだA君のお宅である。あの日、Aは私の手を引いて自宅まで案内してくれた。水路を隔てた通りからは分からなかったが、橋を渡ると長屋が何棟も建て込んでいる。長屋の前にある簡単な屋根を備えた共同の炊事場では、若い女性が炒めものをしていた。Aは彼女に挨拶もしないですぐ横を通過して玄関の前に立ち、「ただ今！」と弾んだ声をかけた。木の枠組みに新聞紙の様な紙を張り合わせただけのドアを開けると、6畳一間の部屋にお母さんと妹さんがおられた。

塩野 突然に失礼します。希望の家の塩野と申します。

お母さん 子供がお世話になっています。塩野さんのことは子供からいつも聞かされています。よろしく願います。

家の中を見せると、Aは再び私の手を引いて希望の家に帰っていった。その日、彼は終始うれしそうにしていた。

ところが、夏前から希望の家でA君を見かけない日が続いた。10月になって久しぶりに彼を見かけたのは児童公園である。すぐにAの前まで行き、声をかけた。

塩野 久しぶりや。どうしてたんや？

A君 俺な…、引越越するねん！

答えたAの顔に表情はなかった。数か月前のあどけなかつた彼と今のAは別人のように見える。東九条で生まれ育った少年がその故郷から逃れたいというそぶっている、ショックだった。

品田真人さんに面談を申し込み、会っていただいたのは10月下旬である。彼は希望の家の活動に対して見識を持った人だった。



児童公園で (1974年10月)

希望の家は東九条の課題を担って活動している。けれどもそれは地域社会のためであって、希望の家が目的ではない。だから、この地域が教育面でも文化面でも共同体としても向上して希望の家を必要としなくなったら、その時は閉鎖する時や。逆説的な言い方やけれど、その時のために希望の家は働いているんや。

面談を希望したのは、「東九条で適当なアパートを紹介してほしい」と希望を伝えるためだった。来年4月からどこで神学を研究するのかはまだ分からない。しかしFMのアドバイスにあったように、まず大切なのは神学するための現場であり、それは希望の家に違いない。だから、遅くとも来年4月にはアパートが必要になる。ただし東九条での生活を始めるにあたっては、「両親の了解を得るという条件がある」と伝えておいた。

品田さんはすぐにアパートを探し、11月上旬にはそこへ案内して下さった。アパートへ向かう道々、ご自分の生活について話して下さった。

私は毎朝牛乳配達をしながら、希望の家の仕事をしている。塩野さんも東九条に来るにあたってはいろいろあるやろうけれど、生活は何とかなる。だから余計な心配はしないでご両親様の了解さえいただければ、来年1月からでもぜひ引っ越して来てください。

紹介されたのは希望の家の近くにある長屋の一軒だった。アパートには台所があった、プロパンガスを置けば自宅で調理もできた。

\*

10月中旬から東九条を生活の場として神学を学ぶための準備は始めていた。まず受験するに際して牧師の推薦状が要らない神学校を探したところ、何と同志社大学神学部がそうだった。ただし「できれば同志社は避けた方が良い」と考えていたので、判断は先延ばしにした。次に教会である。東九条で生活をするならば地域にある教会に出席すべきであろう。けれども、これも所属教会における教会学校の責任があるので難しい判断となる。とりあえず連絡してから、10月下旬に日本キリスト教団 洛南教会の礼拝に出席してみた。牧師は高杉三四子先生で明快な説教をされた。副牧師に小原安喜子先生<sup>4)</sup>もおられた。30名程の礼拝出席者のなかに同志社香里中学校・高等学校でお世話になった大橋寛政先生がおられたので、挨拶した。それと仕事である。大学卒業まで生活費や学費は親の世話になった。しかし、神学研究は自分の希望する道なので、これ以上両親に負担をかけるわけにはいかない。すでに家庭教師はしていた。ある程度の貯金もある。その上で東九条において生活する以上、それなりの仕事は地域で探すべきであろう。とりあえず、新聞の販売所を訪ね朝刊の配達条件について確認しておいた。

希望の家でのボランティア活動や洛南教会の様子は、折々に両親に伝えていた。だから大学4年生の秋になっても一向に就職活動を始めない息子ではあるが、父母は彼の進路希望についてそれなりに気づいていたはずである。しかし、両親に対していつ

---

4) 小原安喜子先生はハンセン氏病患者に特化した外科医でもあった。その頃は京都大学医学部に席をおき、瀬戸内海の島にあるハンセン氏病患者の施設である邑久光明園の病院で働いておられた。次の著書がある。小原安喜子編『韓国の癩医療に参加して—小原さんを支える会8年の歩み』1980年



父母に了解を求める (1974年11月)

までもあいまいにしておける話ではない。どこかで大学卒業後の希望を説明して、了解を得なければならない。品田さんが11月上旬にアパートを紹介して下さったので、「今がその時だ」と思い父と母に話を聞いてもらった。

和夫 分かったと思うけれども、来年4月からは東九条に引越して希望の家でボランティア活動を続けながら、神学の研究を始めたいと考えている。

父 そうか、東九条に行きたいか?!

和夫 これは自分の希望やから、一切迷惑はかけへん。生活費も授業料もすべて自分です。希望の家の品田さんがアパートの紹介もしてくれはった。契約を待ってもらっている。

母 東九条に行ったらあかんとは言わへん。けどな、そのアパートの契約の話はちょっとだけ待ってーや。

和夫 アパートの契約を待つことは分かった。心配掛けてごめん。けどな、希望の家の子供たちにとって救いとは何なのか、しっかり勉強しておきたいんや。

父母に進路の希望を伝えてホッとしたのだと思う。春から腸の調子が悪かった。電車に乗っていると、突然腹部に鈍痛を感じるがあった。それが秋には頻繁になっていた。鈍痛に伴って出る脂汗も秋以降はひどくなっていた。それでも我慢していた。しかし、両親との話し合いを終えると「医院に行くべきだ」という思いが強くなった。それで11月末に枚方市民病院へ行き診察を受けたところ、改めて大腸の検査をすることになった。検査ではまず浣腸によって大腸をきれいにした。それから我慢できるかぎり造影剤を入れて、大腸の様子を調べた。検査を終えると診察である。医師からこのような指摘をされた。

最近わりと見られる症状ですが、大腸が癒着しています。腹部に鈍痛を感じたり、脂汗が出るのはそのためです。病名は神経性大腸症候群と呼ばれています。原因はストレスです。ですから、できるだけストレスを避けることです。日常生活では心労の原因となっている事を避けて下さい。そうすると、自然と良くなってきます。外科手術としては大腸を50センチほど切り取るという方法もあります。いずれにしても、暫くは無理をしないで体を大切にして下さい。

市民病院から自宅へ帰る途中、「春以来の生活に無理があったんや。とくに精神的にきつかったからな」と振り返っていた。親に心配をかけるので、検査の結果は差し障りのない程度に伝えておこうと思った。

#### (4)

同志社の創立記念日である11月29日には、よるだん会に所属している同志社関係者有志数名で若王寺山に登った。両親への説明や大腸の検査と診察を終えていたこともあって、足取りも軽く早天祈祷会に参加できた。会場に着くと遠藤彰先生の姿が見える。遠藤先生には何かとご指導をいただきながら、進路について一切報告していなかった。それで祈祷会も終わり、参加者が帰り始めるのを待って先生に声をかけた。よるだん会の仲間は近くで待ってくれている。

塩野 来年4月からの希望について先生には報告していませんでした。  
遠藤先生 塩野さんの進路については気にしていません。



左より 塩野 遠藤先生 金澤 中岡  
新島襄先生の墓前で（1974年11月29日）

塩 野 これまでに10年間も同志社に学んでいますので、当初は同志社以外の神学校への進学を考えていました。

遠藤先生 同志社以外だと青山学院の神学部は良かったのですが、残念なことに閉鎖されてしまいました。

塩 野 それから先生もご存じのように、東九条にある希望の家でボランティアをしています。あの活動を足がかりにして神学の研究ができないものかとも考えています。

遠藤先生 それはいいことです。現場を持つと神学に個性が生まれてきます。

塩 野 そうすると神学をするのに、同志社大学の神学部が一番ふさわしいということになります。

遠藤先生 そうですか。そういうことでしたら、ぜひ神学部も同志社において下さい。大歓迎です。

あの時遠藤先生が喜んでくださる顔を見て、「同志社の神学部でもいいか」と思えた。実のところ、直前まで神学部については決心がつかかねていた。それが遠藤先生との話し合いによって、何ということもなく同志社大学神学部へと方向が固まっていったのである。

12月中旬になって、母から「東九条のアパートのことで話がある」と言われた。その時に知らされたことだが、東九条への転居希望を聞くと母親はすぐに洛南教会に高杉牧師を訪ねていた。そして、「洛南教会の会員に下宿を営んでいる方がある」「その下宿に一部屋空室がある」「下宿代は1か月が1万2千円で、入居にあたっては敷金と礼金が必要である」ことを調べていた。その上で、彼女は言った。

洛南教会の方の下宿やったら、東九条に引越してもいい。ただし、下宿にかかる費用は一切自分で持つんやで!!

母の申し出を受け入れた私はまず、品田さんと会って事情を説明し了解していただいた。次に洛南教会で高杉牧師から家主である会員の方を紹介いただき、彼女のお宅へ行く。2階建の日本家屋で1階は御家族の住居、2階の4部屋を下宿として貸しておられた。4畳半の畳の間に2畳ほどの板の間と押し入れが付いている。台所とトイレは共用である。その場で契約書を交わし、1975年1月15日から入居することになった。

改築された香里教会新会堂は鉄筋コンクリートの総2階建だった。旧会堂で礼拝堂の説教壇があった辺りを玄関として、その前は空き地にしていた。玄関から入り左手にある受付の前を通過して正面にあるドアを開くと、そこに礼拝堂がある。2階に上がると、アコーデオンドアで仕切ることのできる広いスペースになっていた。その向こうは牧師館である。

クリスマスが終わると、よるだん会主催でこの年も餅つき大会を行うことになった。昨年同様もち米は大原先生のご実家へお願いし、道具一切も大原先生がお世話下さった。教会で餅の予約を取った所、希望者は多くすぐに予定数に達した。ただし、昨年とは違うプログラムもあった。餅つきを終えた後に新会堂の2階で計画した夕食会である。いこい食堂や止揚学園には事前に夕食会への案内を出しておいた。

餅つき大会が始まると、すべては順調に進むかに思えた。ところが、思いもしなかったアクシデントが起こる。高校生男子が力強くついていた時だった。杵を持ちあげると、くっついた餅まで彼の頭上に上がっていった。目の前の餅が消えてつき手の戸惑った一瞬、餅は杵を離れて「どすん！」と落ちた。それが白の上ではなく、すぐ

横の地面だった。ひどく恐縮する本人の周りでは爆笑が起こった。夕食会にはよるだん会・青年会・高校生・壮年会・婦人会から30名ほどの参加者がありグループに分かれて鍋をつついた。会場はにぎわった。止揚学園から来て下さった阿部富久世さんが学園の近況を熱く語って下さった。

\*

年が明けると引っ越しの準備に入る。小学校入学時に買ってもらった学習机<sup>5)</sup>は持っていき、板の間に置くことにした。学習機の隣にはスチール製の本棚を据え、収める本を選択した。後は当面必要な衣類と布団、こまごまとした生活用品にカセットデッキ、それと通学用の自転車である。「友達が来たときに困らないように」と、数名分のお茶碗とお皿は母親が用意してくれた。家庭教師をしていた小西家のお母さん（小西敏子さん）は大きな紙袋いっぱい食べ物差し入れて下さった。その後も小西さんは家庭教師を終えると毎週のように「お兄ちゃん、これ持って行き！」と言って、紙袋いっぱいの食品を下さった。

引越しの朝は来た。「引っ越しを手伝います！」と申し出てくれていたよるだん会のE君が、朝9時過ぎには軽トラックで来てくれる。代金を払おうとすると、「いつもお世話になってますから、ガソリン代だけでいいです」と固辞するのだった。机や本棚を運ぶのは父が手伝ってくれた。割れ物を新聞紙に包み、段ボールに入れる作業は母がしてくれた。積み終えて10時過ぎには家を出発することになり、父母と言葉を交わした。

和夫 行ってくるな。

心配掛けるけど、身体には気を付けてな!!

父 元気でな!!

母 身体だけは、気をつけるねんで!!

---

5) この学習机は現在（2014年10月）も母親がそろばん教室で使っている。





引越しの朝 (1975年1月15日)

それから軽トラックの助手席に座り、両親に別れを告げると車は出発した。見送ってくれる父母の視線が背中に痛かった。

事前に調べていたらしく、Eが道を迷うことはなかった。枚方から国道1号線を北向きに走り、京都市に入って少し行くとなじみの中華料理店がある。そこで少し早い昼食にした。そこからさらに北へ行き、十条通りで東に向かう。しばらく走って烏丸通りを北に行くと、すぐそこに下宿はあった。家主に到着の挨拶だけ済ますと、荷物をおろし2階の部屋まで運んだ。作業を終えると、手伝ってくれたEは大阪へ帰っていった。部屋に戻ると一人で荷物の片づけを続け、夕食には小西さんの差し入れを温めていただいた。

下宿は洛南教会から烏丸通りを東へ渡るとすぐのところにあった。2階にある下宿の部屋は道路沿いに3部屋、反対側は階段を挟んで一方には台所とトイレ、もう一方に1部屋ある。私の部屋は道路側の真ん中にあり、両側には竜谷大学の学生がいた。反対側の一部屋には初老の男性がおられ、下宿人は全員男性である。週に2回、1階にある風呂に入る時間を決められていた。しかし、時にはゆったりと湯船につかりたく、竜谷大学の学生と銭湯に出かけた。買い物にはすぐ近くにあったスーパーを利用する。前には八百屋さんがあって、「かぼちゃはどうして調理するのですか？」など

と尋ねては野菜を買った。すぐに顔を覚えていただいた。下宿している間、一度として外食をしたことはない。大学へ行く時にも弁当を持参した。手間ではあるが、自炊は安くつくことをあの時に学んだ。同志社大学へは自転車で大石橋から九条通りを東に行き、東大路通りに出ると北に向かい、今出川通りを西に曲がって通う。30分ほどかかった。体調が十分でなかったので、新聞配達所を訪ねることはしなかった。

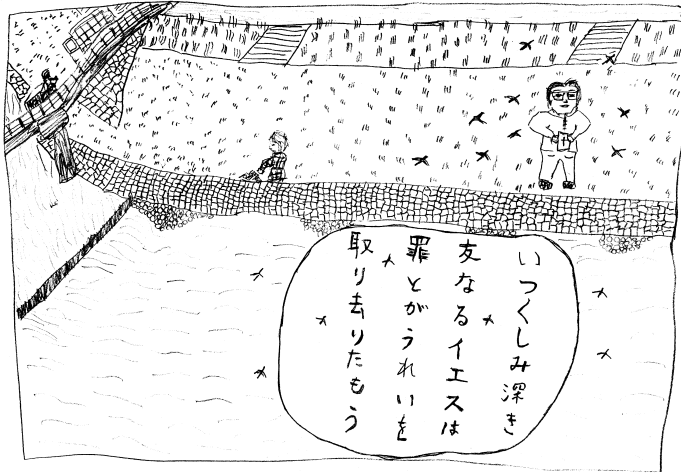
あの頃、朝の祈りの時間を大切にしていた。下宿生活を始めた最初の朝も6時から1時間を祈りの時として聖書を読み、祈り、下宿の前の道を掃除する。翌朝も同じようにしたが、「何か違う」と違和感があった。それで3日目の朝からは鴨川の河原で祈ることにした。シスター水元と歩いた道を行き、東山橋を渡ると橋の下流側から河原に降りる。それから姿勢を正して鴨川のあちら側に広がる東九条に向かって聖書を読み、祈り、讃美した。京都の1月は寒い。雪の舞う朝もある。しかし、祈る心は熱く燃えていた。歌っていると、ユリカモメ（都鳥）が次から次へとやって来てはすぐ目の前を飛んでいる。まるで祈りと讃美の歌声に合わせて舞っているかのようで、うれしかった<sup>6)</sup>。

祈り始めて数日後のことである。讃美していると河原に降りてきて、焚火を始めるおばさんがいた。歌い終わるのを待っていたかのように、彼女は「寒いやろ。あたっていきいな！」と声をかけて下さる。しばらくおばさんと並んで小さな焚火にあたった。火に手をかざしていると、不思議と手のひらから全身がポカポカと暖かくなっていく。それからおばさんは毎朝、河原におりてきて小さな焚火を熾しては、同じように「寒いやろ。あたっていきいな！」と声を掛けて招いてくださった。手を温めると、希望の家の前を通って下宿に帰った。すると、パンなどを扱っている店の前でたむろしている子供がいる。みんな希望の家の子供である。それで手を繋いで彼らを小学校まで送っていった。

ある朝の事である。東九条からリヤカーを引いて「廃品」（資源物）回収に出かける人たちがいた。リヤカーを引いていたあるおばさんが橋の上から私を手招きして、大きな声で叫ばれた。

---

6) 塩野和夫「無言有言の祈り」（『一人の人間に』61-62頁）



君は天使を見たか (1975年1月～3月)<sup>7)</sup>

お兄ちゃん、あんなんと話してたらあかんで！  
お兄ちゃんまで汚れてしまうで！

課題を抱えた東九条でも「焚火のおばさんはとりわけ差別されている人なんだ！」  
と思った。おばさんは何も聞こえないかのような振りをして、焚火を熾し続けておら  
れる。私もおばさんと並んで焚火にあたり続けた。

\*

1971 (昭和46) 年4月に入学式は無かったが、75 (昭和50) 年3月の卒業式も中止  
になった。島一郎ゼミナールでは75年1月に山陰地方へ卒業旅行に出かけ、2月にな  
って最後に集まる機会を持った。島先生は席上で「塩野君！」と声を掛けて下さり、  
小さな包みを差し出して言われた。

7) 塩野和夫「君は天使を見たか—序文に代えて」(『一人の人間に』1-6頁)



前列 右から 2人目 神田愛子さん 3人目 Kさん  
神田愛子さんの送別会 (1975年3月)

これは卒業旅行で行った松江のこけしや。参加できなかった塩野君にみんなからのお土産や。

有り難かった。卒業旅行には東九条への転居と重なり参加できなかった。箱を開けてみると、1枚の板に立っている2体のこけしが並んでいる。こけしを眺めていると、旅立ちをするゼミ生1人1人への島一郎先生の温かい眼差しが思われた。

3月になって神田愛子さんの送別会が牧野で開かれ、みんな参加した。初めて訪ねたお宅は閑静な住宅地にあり、彼女は3人で共同生活をしていた。発足当初から参加し、よるだん会と共に歩まれた2年間だった。それがいかに豊かな交流の場であったかを送別会は語っていた。1年余り後によるだん会メンバーであるKさんの結婚式が大阪で挙行される。広島から駆け付けた神田さんも交え、時を忘れて語らいの時を楽しんだ。

同志社大学神学部の3年次転入学試験は3月上旬に神学館で行われた。試験を終えてから、すぐ後ろの席にいた受験生と御所を散歩する。東海大学海洋学部を卒業して試験を受けたS君である。歩きながら熱く内村鑑三を語るSに、「この人はロマンティストだな」と思った。無事試験に合格し、入学手続きと健康診断に行った日である。

神学館の入口でヨルダン社の方と出会った。私の合格を知っておられて、「おめでとうございます」と声をかけながら差し出された手に1冊の本があった。ギリシャ語の文法書である。「神学部に入学すると、遠藤彰先生のもとで新約聖書神学を研究するだろう」と考えて下さったお祝いのプレゼントだった。